特集に寄せて

世界も介護も おばちゃんのものだ ――― 三好春樹

本誌が発行される頃には、昨年に続いてのインド旅行も終わって無事に日本に帰ってきているはずだ。今回はどんな事件が起き、どんな印象で帰ってくるのか楽しみにしながらこの原稿を書いている。

その昨年のインドでの話である。オールドデリーの街路、アグラの駅前、プラットホーム上で私はショックを受けていた。小学校の低学年ぐらいの子どもの靴磨きが何人も寄ってくる。もの売りも来る。乞食の子どももやってくる。何もしないで座り込んでいる若者もいる。どうやら靴磨きも乞食もカースト制度で固定されているらしく、誰もができるわけではなくて、それさえできない人は、ただ座って施しを待っているらしい。

両足のない若者、身体の一部がふくれあがっている人、自分の障害や病気をことさらに見せて金やものを恵んでもらおうと座り込んでいる。

私はどうしていいかもわからない。そこでこう決めた。テレビの画面を見ていることにしよう、と。映像だと思えば反応を求められることもないから、どうしていいかわからなくても困ることはない。乞食とも病人とも目を合わせない。ただ客観的な観察者になろう、と。

おばちゃんのたくましさの根拠

ところが、そのせっかくの現実逃避の安全な立場を脅かす人がいるのだ。人と目を合わさないようにプラットホームを回遊している私を呼ぶ大きな声がする。

「三好さ～ん、ほら靴磨き、靴磨き。革靴は私とあなただけだから５ルピーおつりをもらう代わりに２人でやってもらおうよ！」

同行していた中矢暁美さん※である。私は乞食に金を恵むのも嫌だし、子どもに靴を磨かせるのも抵抗がある。だから逃げているのに、中矢さんはそんな私を否応なく現実に引きずり込むのだ。

よく見ると、男性たちが私と同じようにショックを受けて考え込んでいるのに対して、女性たちは平然とふだんどおりに見える。本誌155号の「介護夜汰話　インド・ムガルサライ駅前広場の夜」にも書いたが、ホームレスの子どもたちと遊び、列車の乗客と友だちになる。モロッコ旅行で知り合った女性は、ガンジス川での沐浴までやったくらいだ。

女性、特に“おばちゃん”と呼ばれる中年女性の現実適応能力の高さはどこからくるのだろうか。どんな生々しい現実にも驚かないで平常心でいられるのは、妊娠・出産・育児という最も生々しい経験をしてきたからではないか。いや、そんな経験のない人でもそうだから、そうした生々しいことをする性だから、それが平気になるようにつくられているのだろう。

おばちゃんと介護の相性

こうした性は日本のような近代化された社会よりもインドのような混沌とした社会にこそ似合っている。体系化されて、教科書のある分野よりも介護のような何もわかっていないような分野にこそ向いている。

介護という分野は、資格もできたし介護保険という制度もでき、ちゃんと近代化され体系化

ぼけ老人をかかえる家族として、また、本人、家族の支援者として、毎日考え、あきらめ、たまに喜びながら奮闘しています。そしてグループホームで働きたいと思っています。じっくり、どっぷり“ぼけ”とつきあいたいと思うのですが……甘いでしょうか。（茨城県　Y.M）

されてきたかに見える。だから、多くの企業が参入してきた。しかし、その資格で何をしたらよいのか、その制度を使って何をすべきなのかという肝心の介護の中身はまだほとんどわかっていないという分野なのだ。

特に、痴呆老人のケアを小規模でみていこうという介護は、どこにも教科書なんかない。そんな分野は女性、特におばちゃんがやるに限る。男がやると、制度で仕事をしようとするだけで、肝心のニーズに応えようようとしないか、こうあるべきという理念にとらわれて柔軟性を失ってしまうことがじつに多い。

老人、特に痴呆老人とその家族という生々しい現実を相手にしている仕事は、とても体系化なんかされないし、近代という狭い思考の枠に入り込むものでもない。だから、体系とも近代とも無縁のおばちゃんたちが決めて、おばちゃんたちがやる。これが一番だ。

男にできることはあるのか？

では男の役割は何だ？　まず、おばちゃんの邪魔をしないこと。どんなに無謀に見えようとも見守ること。できれば、おもしろがって応援することだ。さらに、できれば、おばちゃんによる混沌とした介護実践を、混沌をそのままに近代に強引に結びつけることができるといい。

つまり、制度にのったものだとごまかしてちゃんと金をもらえるようにし、意義や効果があるのだとデータをでっちあげて社会に認めさせることだ。

なにしろ、この国では右肩上がりのデータを示さねば福祉予算すらつかないのだ。これでは、老いや死をちゃんと支えることなどできるはずがない。そんな日本でまともな実践をするためには、ごまかしやでっちあげしかないではないか。言葉や数字をうまく使いこなせて、世間をよく知っている男がここで役に立つはずだ。

しかし、今回の特集の顔ぶれを見ると、そこまでやってしまう女性ばかりである。こうなると、もはや男の出番はなくなってくる。女が主役で男はそれになんとかついていく、という世界の基本が見えてくる。そういえば芹沢俊介さんの本で『ついていく父親』（春秋社刊）という傑作があったなあ。

どうか、女性たち、特におばちゃんたちよ、日本の介護の未来をよろしく。

※**中矢暁美**:「託老所あんき」(愛媛県松山市)代表。看護師。ホームヘルパーを経て、築100年の民家でデイサービスを始めた。その経緯は著書『老いを支える古屋敷』（雲母書房）に詳しい。「あんき10周年セミナー」が3月15日（土）に松山市で開催。東京と大阪からのツアーも組まれている。現地集合も可。（2頁参照）

半年前から訪問入浴の看護師をしています。ひとり浴に比べたら実施の仕方はまるで違うけれど、少しでも満足していただけるようにコミュニケーションを大切にしています。訪問入浴の特集をしてくれるとうれしいです。（富山県　I.Y）